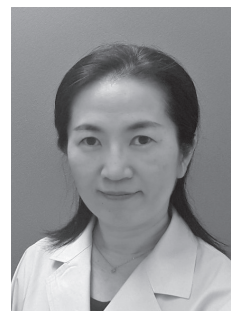


自ら道を拓く薬剤師であり続ける

日本病院薬剤師会理事
鹿児島市立病院薬剤部長
有馬 純子 Junko ARIMA



病院入口での検温や手指消毒、入管制限など、COVID-19への対応を当たり前と感じつつ、久しぶりに出た街中のあまりの人の多さに目を見張る、そんな世間とのギャップに驚きを感じる今日この頃。皆様のところはいかがでしょうか。しかし、いかなる病気が流行ろうとパンデミックで大騒ぎをしていようと、これまでの疾患がなくなるわけではなく、従来の患者治療がなくなることもありません。現在、皆様は何を目標に、何をモチベーションに働いていますか。

私自身が薬剤師になった頃、病棟業務に従事するには少なくとも10年の勤務歴が必要と言われ、1つの目標でもありました。それが今や卒後半年で病棟に放り込まれ、多職種と当たり前話をしています。もちろん経験不足は否めませんが「それなり」の対応はできているようです。とても真面目に緊張感をもって取り組む姿に頼もしさを感じる一方、多くの部署に薬剤師の活躍の場が広がった今、服薬指導から大きく進んでいない現状に、もどかしさを感じる場面もあります。

実務実習生や新人薬剤師に将来の目標を尋ねると、「専門薬剤師」という言葉が必ず出てきます。しかし、新人薬剤師の研修を終え、病棟での活動が始まり、そして病院薬学認定薬剤師の認定が取れるようになった3年目、この目標を明確に語る薬剤師がほとんどいなくなるのは、どこに問題があるのでしょうか。研修施設の少なさ、これは是非、薬局管理者に認定施設となるべく資格者の育成計画をお願い致します。これ以上に実感する理由の1つが、薬剤師はジェネラリストであり続ける必要があることです。医師の専門化と働き方改革と言われる昨今、薬剤師が対応すべき幅があまりにも広すぎることを目の当たりにします。また特別な資格がなくても、薬剤師の業務はある程度できてしまいます。その状況下、受験や症例報告作成はただの手間でしかないとの残念な意見も聞きます。ではなぜ「専門資格」はできたのか、ジェネラリストであるだけでよいのか、有資格者へのほかからの期待を現場で感じていませんか。

すでに、知識や治療の均てん化を目指した「資格創設期」は終わりました。医師の処方不備の是正、服薬指導や副作用対策の提案は薬剤師の通常業務の一部となり、有資格者の活動の場は、治療決定や医療安全、地域連携、教育に移り、「資格発展期」にあります。自ら疑問点を見出し、解決法を探り、次世代を育て、その活動を広く発信し情報共有することが期待されています。有資格者の皆様、一歩進んだ活動への目標設定はできていますか。

もちろん、専門資格の有無によらず、さらなる業務展開は全薬剤師の目標です。薬剤による危険を薬剤師として事前に予測する活動に切り替えること、問題点を先んじて考える姿勢は重要です。与えられる情報だけでなく、自分で情報を取りに行くことを忘れてほしくありません。仕事を請け負うのみでなく、タスクシフト・シェアの転換期の今、これまででない仕事の内容を考えてみませんか。

「ただやっているだけではダメ。中身に疑問をもたなくなったら薬剤師として終わり」と、ある先輩に言われたのを思い出します。